

寄附講義「会社研究」令和3年度 第3回目

令和3年4月28日(水) 13時10分

講師 大分合同新聞社

取締役 論説委員会委員長

清田 透 氏

テーマ 「変革期の新聞社」



今回の寄附講座は、コロナ禍のもとオンライン講義となりました。



講義は、次のような内容で行われました。

○新聞社を取り巻く環境

○新聞とは

○大分合同新聞社について

○大きく変わった新聞社～入社して40年

○記者の仕事

○メッセージ

その概要は次のとおりです。

ネット時代の新聞離れ、新聞広告の減少、新規事業への模索など、新聞社を取り巻く環境が大きく変化する一方で、高い信用・信頼度のもと、権力の監視や地域づくりの支援において、その果たす役割はますます欠かせないものとなっている。

こうした中、大分合同新聞社は1886年の創立から、本年で135年目を迎え「大分県を豊かに」を社是に、「とことん地域密着」を企業理念とし、発行部数1日18万部、大分県内シェア60.1%を占めるに至っている。

特に、この40年は、新聞社にとって激動の時代であった。

技術革新により、制作の方法が活版印刷からデジタルデータの画面へ、手書きの記事からパソコンの活用へ、取材の道具も固定電話やテープレコーダーから携帯電話やICレコーダーへと移り変わった。

また、取材環境も「個人情報」を理由にした取材拒否などが増加してきている。

しかしながら、変わらないものもある。それは、現場を歩いて人からの話を聞くことである。人からの話は、活字となっていない面白い話がたくさんある。

これが新聞記者の醍醐味である。

取材で大切なことは、

- ・とにかくたくさんの人に会い、その人の話をよく聞くこと。「耳学問」。
- ・アンテナを敏感にして五感を磨くこと。
- ・まずは、そこの地理、歴史を学ぶこと。
- ・共感すること。
- ・世の中に興味を持つこと。

などであり、これは人生にも通じることである。

以上のお通り、長年にわたり新聞記者として活動してきた経験を踏まえ、これから新たに社会に出ていく学生諸君に対し、仕事や人生に対する向き合い方をお話ししていただきました。

最後の質疑応答において、若者の活字離れについて一言。

「スマホやネットの利用は他を排除し自分の好むものしか見ない傾向が強くなる。

いろいろな記事が書かれている新聞をぜひ読んでもらいたい。」